

「主体的・対話的で深い学び」をめざす授業づくり

—自分の既有知識・生活経験から類推する
アクティブな学び—

都留文科大学 鶴田清司

1

1. 「主体的・対話的で深い学び」とは何か

「学習指導要領」（2017年版）の考え方

○主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげるもの

○対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めるもの

○深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうもの

2

「主体的・対話的で深い学び」（私論）

「ごんぎつね」（新美南吉）のあらすじ

ひとりぼっちのごんぎつねは、村の人たちにいたずらばかりしている。ある秋の日、ごんは兵十が川で魚を捕っているのを見て、いたずらがしたくなり、網の中の魚を全部逃がしてしまう。ところが、その後、兵十の母親が亡くなったことを知って、自分のせいで母親にうなぎを食べさせることができなかつたと後悔する。そして、そのつぐないに兵十の家に毎日栗や松茸を持っていくようになる。ところが、兵十はごんの行為（好意）に気づかないで、神様が恵んでくれていると思ひ込む。それでもまた、ごんは栗を持っていくが、とうとう兵十に見つかってしまう。何も知らない兵十は「また、いたずらをしに来たな」と思って、ごんを火縄銃で撃つてしまう。ところが、家の中に栗が置いてあるのを見て、ようやくごんの行為に気づく……。

3

舞衣が書いた「ごんぎつね」の感想文

「夏ぐらいに、友達の教科書をかりて教科書にらくがきをして、絵を書いてしまって、ゴメンネといっかいあやまったときはゆるしてもらえたけど、昼休みにはなしかけてもむしされ、三回くらいあやまっても、ゆるしてもらえず、手紙で、二回目だけど、やはりゆるしませんと手紙でかかれ、もういらついで母さんにゆつて、「おわり」になった。まだ、なかよしでわかない。私は、ごんであり、兵十でもあります。ごんの理由は、なんかいもあやまっている所。兵十の理由は、らくがきをしてしまった、人の絵を書いてしまったことです。」

（原田大介『インクルーシブな国語科授業づくり』2017年、明治図書）

4

教室における学び合い

菜摘

- ・経済的貧困状態の家庭、父親による暴力、その怒りの矛先として教師や友だちに暴言・暴力
- ・自己肯定感の喪失

菜摘は舞衣の感想文を繰り返し読んでいた。

友達の教科書に落書きをして、なかなか許してもらえなかつた舞衣のことが、暴言や暴力を繰り返す菜摘にも影響を与える。

「私は、ごんであり、兵十でもあります。」

菜摘は、このことばに自分自身の現状を重ね、自分の言葉を紡ぎ出していく。

5

菜摘のことば

「せつない。二人ともかわいそう。うちとやよいの関係に似ている。どっちもどっちでわるいと思う。私とやよいがけんかしてなかなかおりしようとすんだけど、まわりのともだちがわるぐちをいってなかなかおりしなくていいじゃんといわれるので、なかなかなかなかおりできないんだけど、さいしゅうてきにはなかなかおりして、もとの二人にもどる。」

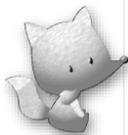
→「ごんぎつね」を通して新たな自己認識と他者認識が生まれている

6

友達の教科書に落書きをして、なかなか許してもらえなかった舞衣が「私は、ごんであり、兵十でもあります」と述べたことが、いつも暴言や暴力を繰り返す菜摘にも影響を与え、「せつない。二人ともかわいそう。うちとやよいの関係に似ている」と自分の経験と結びつけて自分のことばを紡ぎ出していく。

↓

「主体的・対話的で深い学び」の生成



7

「主体的・対話的で深い学び」とは

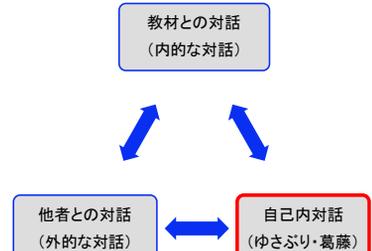
主体的……舞衣や菜摘のように、教材を自分の経験と結びつけて、他人事（ひとごと）ではなく、自分事（わがごと）として考えること。

対話的……教材との内的対話（ごんはなぜいたずらばかりするのだろうか？ そう言えば自分も…）、他の子どもたちとの外的対話（友だちの意見を聞く、質問する、話し合う……「おや？」「なるほど！」）が行われること。

深い……以上のような学び合いの結果、自己内対話（自分ともう一人の自分との対話）が生まれ、自分の最初の考えが見直されたり変わったりすること。既知知識の再構成と新たな知識の創造。

8

「深い学び」の成立のポイント



教材との対話
(内的な対話)

他者との対話
(外的な対話)

自己内対話
(ゆさぶり・葛藤)

- ・内的な対話としての「沈黙の思考」の大切さ
- ・外的な対話における「聴くこと」の大切さ

9

2. 新しい教育課程の方向性
～コンピテンシー・ベースの教育へ～

- 近年、各教科固有の知識・技能に基づく「コンテンツ・ベース」の教育にとどまらず、教科の枠を超えた汎用性の高い能力（コンピテンシー）を軸に、「コンピテンシー・ベース」の教育を推進しようとする動きが国際的に広がっている。
- この背景には、産業社会から知識基盤社会への進展に伴い、正解のない問題状況の中で、よりよい解決に向けて知識をいかに創造・活用するかということが課題になっているという認識がある。

10

◆コンピテンシー・ベースにおける学力観

単に教科書に示された知識・技能の習得にとどまらず、思考力・判断力・表現力などの認知スキル、協働的に問題解決に取り組む意欲や自己調整能力、対人関係などの社会スキルまで学力概念が拡張している。

OECDのDeSeCoプロジェクトによる「キー・コンピテンシー」、ATC21Sプロジェクトによる「21世紀型スキル」などが知られている。

PISA

日本では、「生きる力」「社会人基礎力」「学力」など

11

PISA (Programme for International Student Assessment)
(OECD生徒の学習到達度調査)

- ・2000年から3年おきに実施。15歳（高校1年生）対象。
- ・最新調査（PISA2018）では、79ヶ国（地域）が参加、調査対象者は約60万人（日本では約6000人）。
- ・コンテンツ（各教科で学んだ知識・技能）よりも、コンピテンシー（その知識・技能を日常場面の問題解決に活用する力＝思考力・判断力・表現力など）をみる。
- ・出題分野
 - 読解力（reading literacy）
 - 数学的リテラシー（mathematic literacy）
 - 科学的リテラシー（scientific literacy）

12

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
(中央教育審議会答申2016年12月21日)

育てたい資質・能力の「三つの柱」

- ①何を理解しているか、何ができるか
(生きて働く「知識・技能」の習得)
- ②理解していること・できることをどう使うか
(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)
- ③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)

19

◆「未知の状況にも対応できる」類推という思考法

- 類推とは、「過去の類似した経験を現在の場面に適用するためのメカニズム」であり、「現在の問題状況とまったく異なった領域で経験されたことであるにもかかわらず、現在の問題状況と本質的な意味で類似しており、その問題を解くのに役立つ」ものである。(鈴木1996)
- 現在直面している未知の状況(A)に対して、過去の類似の経験(B)から推し量ることによって問題解決を図ることである。(ex.放射線問題)



20

「未知の状況にも対応できる」思考力・判断力・表現力の育成のために

- ◆各教科において、さまざまなテキストを読んで自分の考えを論理的に述べるという言語活動の充実を図る必要がある。(教科横断的なコンピテンシーの育成へ)
 - ◆そのためには、「根拠・理由・主張の3点セット」を使うことが有効である。
 - ◆特に、理由を自分の既有知識や生活経験と結びつけて(類推して)具体的に考え、述べるのが大切である。
cf.論理的=具体的
- 類推思考によって、テキストを(わがこと)として捉え、理由づけの質を高める、アクティブな学び。

21

4. 生活経験に基づく類推(推測)による理由づけ

神奈川県は全国各地から教員志望者が集まってくる。
(根拠となる事実)
(理由づけ)
私は神奈川県の教員になりたい。(主張)

【理由づけが具体的な応答例】

全国各地からさまざまな文化や教育の体験を持った人たちが集まるので、職場や研修会などで交流することによって、教師としての見方や考え方を広げたり、効果的な授業方法を学んだりすることができて、自分をさらに成長させることが出来ると考えたからです。

実際、私の大学も全国各地から学生が集まっています……

22

◆新聞記事の「比べ読み」(中学校2年)

- 沖縄慰霊の日(6月23日)の新聞記事(読売新聞・朝日新聞・産経新聞・静岡新聞の4紙)を比較して、「戦争を忘れない」という沖縄の人々の思いを最も強く伝えているのはどれかを発表し、話し合うという授業。
- 生徒たちは、比べるときの観点として「写真」「見出し」「本文」のいずれかのグループに分かれて、自分の意見を発表した。その際「根拠・理由・主張の3点セット」を使うことになっていた。
- 写真を比べるグループの発表を紹介する。

23



(産経新聞2008年6月24日朝刊)

24

生徒の発言例

この写真では、お年寄りが慰霊碑の前で靴を脱いで正座しています。(根拠)

そこから、戦争で亡くなった家族や友達を悲しんでいる様子が伝わってくるので、(理由づけ)

この写真がいいと思います。(主張)

- 単なる根拠(事実・データ)だけでなく、理由(事実・データの解釈・推論)も加えることによって、説得力が高まっている。

もっと具体的な理由づけにするには？

25

生活経験に基づいた具体的な理由づけの例

この写真では、お年寄りが慰霊碑の前で靴を脱いで正座しています。(根拠)

正座をするのは相手に対して敬意を表す時で、この写真も亡くなった家族や友達のことを自分にとってかけがえのない大切な人だと思っていたことが伝わってきます。さらに石畳に何も敷かず正座するのは足が相当痛いはずなのに、亡くなった人たちのことを考えると……

- 単なる根拠(事実・データ)だけでなく、理由(事実・データの解釈・推論)も加えることによって、説得力が高まっている。

- もっと具体的な理由づけにするには？
→生活経験に基づいて考えることが必要
(上の例は「類推」ではなく「推測」「想像」)

26

「大造じいさんとガン」(棕鳩十)の授業

○あらすじ

「残雪」というガンの群れのリーダーのおかげで、大造じいさんは狩りに何度も失敗するが、3年目に、おとりのガンを使って残雪をおびきよせるというとおきの作戦を使う。途中までは作戦がうまくいくが、突然ハヤブサがおとりのガンを急襲する。すると、かつての仲間(今は敵)であるそのガンを救おうとして、残雪がハヤブサと闘い、重傷を負う。その姿を見て、大造じいさんは心を打たれる。そして、傷が治るまで介抱してやり、春になってまた残雪を自然に返す。

○授業の課題

「なぜ大造じいさんは銃を下ろしてしまったのか？」

27

「大造じいさんはなぜ残雪を撃たなかったのか」

- テキストを根拠にしつつ、子どもの既有知識や生活経験に基づく類推による理由づけ。

- 残雪の行為は子どもが素手で暴漢に立ち向かっていくようなものである。しかも、自分の友達ならさておき、自分の敵である人間を救おうとするだろうかという問題提起をすることによって、残雪が普通の人間以上の存在であり、それを卑怯にも狙っている大造じいさんは「鳥以下」ということになる。

- 子どもたちが具体的に考え、具体的に語る時、その主張は論理的になっていく。

28

中学校3年「故郷」(魯迅)

○あらすじ

「わたし」は二十年ぶりに故郷に帰ってくる。しかし、心の中に思い描いていた昔の故郷の姿はそこにはなく、荒廃した状況に衝撃を受ける。「豆腐屋小町」と呼ばれていた「ヤンお婆さん」は「五十がらみ」のいやらしい女に変貌していた。幼なじみのルントウとも再会するが、昔の「すいか畑の銀の首輪の小英雄」の面影は全くなくなっている。「ああルンちゃん——よく来たね！……」と呼びかけたが、「旦那様！……」と答える。厚い壁が二人の間を隔ててしまったことを知り、「わたし」は衝撃を受ける。そして、次の世代の子どもたちに新しい生活への希望を托しつつ、故郷を離れる……。

29

中学校3年 「故郷」(魯迅)の授業事例(長元尚子教諭)

- ◇生徒たちは、「旦那様！……。」というルントウのせりふから、かつての「ルンちゃん」「シュンちゃん」という幼なじみの関係ではなく、今は二人の間に上下関係、身分の差、隔絶が生まれていることに気づく。

- ◇何人かの生徒は、その状況を自分自身の生活経験と結びつけて(類推して)捉えている。

30

上下関係・身分差・隔絶の問題をめぐる

生徒の既有知識や生活経験に基づくテキストの
解釈・推論

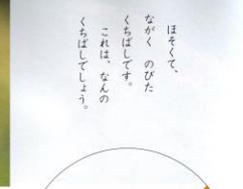
+ 共有性の高い身近な経験に基づく**類推**
(先輩との関係、幼なじみとの再会)

↓
自分の考えを説得力のあるものにする

cf. 「大造じいさんとガン」の事例と同じ構造

31

小学校1年国語「くちばし」



これは、はちどりのくちばしです。はちどりは、ほそながいくちばしを、はなのなかにいれます。そして、はなのみつを吸います。

ほそくて、ながくのびたくちばしです。これは、なんのくちばしでしょう。

32

小学校1年国語「くちばし」の授業

- 鳥（キツツキ、オウム、ハチドリ）のくちばしの形とエサの食べ方に関連があるという説明文。
- 1年生がこの因果関係の論理を理解することは容易ではない。
- 高山裕子教諭は、人間が使う道具（錐、ペンチ、ストロー、金づちなど）を例示して、ハチドリのくちばしはどれにたとえることができるかを考えさせた。
- ある児童が形だけに注目して「錐」と発言したが、他の児童が「花のみつを吸います」という記述を根拠にして、「ストロー」と発言する。
- 他の児童が「ぼくたちも牛乳をストローで吸います」と、テキストの論理を自分の既有知識・生活経験とつなげて類推的に理解し、「だから花のみつも吸える」と理由づけている。
(河野2013)

33

小学校1年国語「くちばし」の授業

- この授業には、学年や教科を超えて、すべての学びに共通する原理・原則が含まれている。
- ハチドリのくちばしの仕組みについて、児童が「ぼくたちも牛乳をストローで吸います」と、テキストの論理を自分の既有知識・生活経験とつなげて**類推的**に理解している。教師も「すごーい!」と高く評価している。
- テキストを「わがこと」として実感的に理解して、「主体的・対話的で深い学び」になっている。

34

◆理科（小学校4年生）の事例

- 止まっている車（A）に走ってきた車（B）が衝突したとき、どちらに大きな力が加わっているか？
最初、多くの子どもはA>Bと考えていた。ところが、A=Bと考えている少数派の子ども（タケ）が、「車じゃなくて人間でやってみて、思ったんだけど……もし走っている人が、止まっている人にぶつかったら、そうとういたいでしょ。」と発言した。
これを受けて他の子どもも、「どっちもいたいと思う」と発言。その後、実験をしてAもBも同じであることを確かめる。
(高垣2009)
- 理科でも生活経験に基づく**類推**の重要性
「作用・反作用の法則」
- 論理的思考力として教科横断的に育成

35

5.まとめ

- ①「根拠・理由・主張の3点セット」を論理的思考・表現のツールとして活用することによって、主張が具体的で分かりやすくなり、説得力が高まる。
- ②特に、理由づけにおいて、自分の既有知識や生活経験をもとに**類推・推測**することによって、テキスト（学習内容）が「わがこと」として実感的に理解できる。
→どの子にも学びがひらかれている
- ③自分の意見を発表し、それぞれの根拠や理由を検討し合うことによって、授業が対話的かつ協同的になる。自分と異なる意見に出会うことで、「自分の考えの狭さや誤りに気づく」「他者の考え方のおもしろさやすばらしさに気づく」といった**学び合い**が引き起こされる。
↓
・真の「主体的・対話的で深い学び」

36

Q&A

Q：子どもの生活経験が乏しくなっている中で、今回のような学びはいかに可能になるのでしょうか。

A：何と言っても生活経験（自然体験・社会体験）を豊かにすることが必要です。夏休みなどはその絶好の機会です。家庭教育や幼児教育との連携も重要になってきます。生活経験は学力の土台になります。

授業においては二つの対策があります。

一つは、直接的な経験でなくても、読書経験や間接経験（見聞きしたこと）をもとに理由づけをすることで、それを補うことができると思います。

もう一つは、一人の子どもの生活経験は限られています。クラスにはさまざまな子どもたちがいますので、それぞれの生活経験を交流することによって、不足を補い合うようにすることです。

37

Q&A

Q：類推における留意点は何ですか？

A：テキストを自分の既有知識・生活経験と安易に結びつけないことが大切です。下手をすると、自己中心的な理由づけになってしまいます。「ターゲット領域」と「ベース領域」の類似性（テキストと自分の経験との整合性）に気をつけましょう。

「根拠・理由・主張の3点セット」で言えば、客観的な根拠（テキストに書かれてあること・社会的事実など）に基づいた合理的な理由づけが必要です。（cf. 沖縄ではご先祖様の墓参で正座するのは普通のことであるという事実）

38

【参考文献】

- ・井上尚美（2007）『思考力育成への方略～メタ認知・自己学習・言語論理～〈増補新版〉』明治図書
- ・宇佐美寛（2003）『論理的思考をどう育てるか』明治図書
- ・河野順子・熊本大学附属小学校編（2013）『言語活動を支える論理的思考力・表現力の育成』淡水社
- ・斎藤喜博（1978）『続・介入授業の記録』一草書房
- ・高垣マユミ（2009）『認知的／社会的文脈を統合した学習環境のデザイン』風間書房
- ・鶴田清司・河野順子編（2014）『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン（小学校編・中学校編）』明治図書
- ・鶴田清司（2017）『授業で使える！論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック～根拠・理由・主張の3点セット～』図書文化
- ・鶴田清司（2020）『教科の本質をふまえたコンピテンシー・ベースの国語科授業づくり』明治図書
- ・原田大介（2017）『インクルーシブな国語科授業づくり』明治図書
- ・S.トゥルミン／戸田山和久・福澤一吉訳（2011）『議論の技法』東京図書
- ・<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/>

39